

和の住まい推進リレーシンポジウム in ぎふを開催

基調講演の講師に、西方里見氏を迎える

～ 岐阜は今年で4年連続開催、

国土交通省、林野庁の取組みも講演～

岐阜県木連が構成団体のひとつである、岐阜県木造住宅生産体制強化地域協議会（岐阜県産直住宅協会・公益社団法人岐阜県建築士会・全建総連岐阜建設労働組合県本部・一般社団法人東海木造住宅協会・ひだ高山木の家ねっと）が主催で、平成27年度より開催してきた「和の住まい推進リレーシンポジウム in ぎふ」が平成31年1月18日（金）13時より岐阜県立国際たくみアカデミーにて行われた。総参加人数103名となった。

本年度の講師は、秋田県より(有)西方設計代表建築家 西方里見氏をお招きした。高気密、高断熱でありながら自然風土を活かし、また秋田杉をふんだんに取入れたエコ住宅や公共建築の設計を30年以上にわたり手掛けている。

今回も基調講演が二部構成となっており、一部は「地域を元気にする高断熱・高気密を基礎としたエコ住宅」という演題で、冬は寒さ厳しく曇天が長く続く、秋田県の気候を感じさせない、快適な居住空間をいかに作り出すかを追求した内容であった。西方氏は高気密、高断熱の施工方法や、建材をゼロから作り出すパイオニアである。床下暖房で輻射熱を利用、屋根断熱



基調講演を行う西方里見氏



会場の後ろには、県産材に関する展示コーナーが設けられた

は構造体の上に断熱層のための骨組みを作る。熱と水蒸気の流れを考えて、断熱層と通気層を施すことが重要である。外壁においては、秋田杉板張りで、コーキングはしない、耐候性のある防湿シートを施工し、雨が壁中に入っても抜ける、すのこのような構造にして、スギの赤身は50年メンテナンスしなくてよい。高気密・高断熱の家は、開口部が小さくなりがちであるが、秋田杉を内装材に使用し、ナチュラルで開放感のある空間を作り出している。吹き抜けで三層ガラスの大きな窓を取り、部屋に太陽光を取入れ逃がさないことで暖房量を減らす。夏は外付けブラインドで日射を調節する。昨今の省エネ住宅（ZEH住宅）は、省エネ性能を数値で追うあまりに、一般木造住宅でさえ、外では室外機が何台もウンウンうなっている。これが本当の省エネであるのか。太陽光発電とはいえ、電力をガンガン使い、機械設備によって省エネが成り立っている。西方氏はそれをメカメカZEHと呼んでいる。

躯体を高性能で作って、自然や機械からのエネルギーを逃さず無駄なく利用する、それがエコ住宅である。西方氏の事務所は、外壁は板張

り、屋根上に草を生やして緑化、日射取得と日射遮蔽が簡単に行える外付けブラインドで太陽光を有効活用している。室内はまるで温室のように植物が置いてある。高气密、高断熱であるにもかかわらず、自然風土になじんだ、たたずまいをみせており、エコ住宅を実践した建築であった。

二部の「和のエコ住宅の住まい」では、西方氏は、洋風の新築住宅でも内装材に木材を多用しており、「和室＝木材を沢山使う」というよりも、「エコ住宅＝木材を沢山使う」としたほうがよい。また古材を再利用して、断熱・気密耐震改修を行っている。古き良き部分は残し、

快適で安全な「和の住まい」の再生を紹介された。

基調講演の前には、国土交通省、林野庁の取組みも発表された。先進国の中で、日本は森林面積/国土面積である森林率がフィンランドに次いで2位という、非常に森林資源に恵まれた国であり、地球環境対策につながる木材自給率の向上、木材利用推進をオールジャパンで取り組んでいくと報告があった。ちなみに、岐阜県は全国で2位の森林率である。

最後は、岐阜県木連藤沢副会長が、取りまとめ報告として、「和の住まい」について4年間の取組みを述べた。
(鍵谷)